年次大会に参加して—先進成形加工 素材と技術のマリアージュ—

西 尾 太 一*

2017年度プラスチック成形加工学会年次大会は、昨年とほぼ同じ1,000人を超える参加者で、益々活況を示し成功裏に閉会された。当学会の発足から関係してきたものとして、ご同慶の至りである。当学会は発足から早くも30年になろうとしている。30年の歴史は、学会としては決して長いとは言えないが、発足以来右肩上がりの学会活動は厳しい社会環境変化の中、本学会が産官学のシーズとニーズの出会いの場であり続けてきた賜物と思う。そして本大会のスローガンが、素材と技術の出会い（マリアージュ）ということで、まさに当学会の発足以来の「出会いの場」の提供に焦点があてられ、環境変化に伴う、目的も解決策も共に創り続けなければいけない「共創」の時代に対応するものと考え。その背景の中、最近の年次大会は、種々新しい取り組み（特別講演はもとより、企画展示・特別授業・ダイバーシティ交流会等）をされて成功されている。筆者は、大会前日に行われている「特別授業」にも参加させていただいた。世界の権威たる先生方が、時間をか

けてやさしく授業いただき、多くの聴衆が参加されていた。その中の1つ、東大の磯貝先生のご授業「ナノセルロースの基礎と応用」の中で、「ナノセルロースの開発では、中々大きな用途が見いだせない。本大会の出会いの場やネットワークに期待している」と話され、本学会への期待を感じさせられた。今後とも特別授業のみならず新しい取り組みを継続していただきたい。また、学会の賞も新規な技術進歩賞が着実に根付いてきており、ご同慶の至りである。今回は、残念ながら青木固賞の該当者がおられなかったようだが、数多くのテーマが申請されるように関係者の方々は、工夫を期待したい。また、大会での発表の中で論文化された方が多い発表が数多くあった。かつて論文編集委員であった関係もあり、多くの方が論文にされて「成形加工」への投稿をお願いしたい。最後に、種々の取り組みが具体化され活況を呈している当学会であるが、その分、関係者の方々の実務・雑事フォローが大変と推察される。種々な取り組みの重点化や変更を果敢に実施されるとともに、元気なシニアの方々も多くおられますので、シニアの我々に何なりとお誘いください。

* Nishio, Taichi
山形大学大学院有機材料システム研究科
米沢市城南 4-3-16 (〒992-8510)

あるシニアの独り言

長 澤 次 男*

毎年、プラスチック成形加工学会の年次大会はいつも東京の船堀にあるタワーホール船堀で開催される。関西から東京へ来る私のような人間には、開催会場がこのように毎年同じ会場と決まっているのは、道に迷う心配もなくありがたい。本学会は、実用や応用に重点をおいた、いわゆる通常の学会とは少し趣を異にした学会かなと私自身の中では位置付けている。私がこの学会に参加始めたのは、射出成形を業とする東大阪の株式会社クニムネでお世話になりだした2005年頃です。ちょうど愛知万博が愛知県長久手・瀬戸地区で開催され、世間はもちろん、プラスチック業界も本学会も環境に関するテーマで沸き返っていました。

さて、今年の年次大会ですが、プラスチック業界の技術を先取りし、その先導役を務められる研究や研究者を引き出すため、本年の加工学会も興味あるテーマを取り上げられていました。私の目を引き付けたのは、ナノカーボンマテリアルに関して取り上げられたセッションでした。私のようなこの分野にほとんど素人の人間にとって、産業技術総合研究所の畠賢治氏による特別講演「いよいよ本格的な普及がはじまったカーボンナノチューブの現状と未来像」

は、この素材が2020年テイクオフするとの同氏の力強い結語で締めくくられ印象的でした。また1階展示会場で展示されていましたカーボンナノチューブ（CNT）に関する展示も、講演の内容を補強してくれ非常に参考になるとともに良く理解できる組み合わせでありました。

次に興味をもって聴講したのは、発泡成形の分野です。本技術は、私どもクニムネも今後の発展の可能性を多く秘めている射出成形技術として開発に力を入れています分野です。ここでも興味深い内容の発表があり、ある意味で身を引き締められる思いになりました。チョット気になったのが、分かれた会場の設定が発泡技術だけ？かどうかわからなかったのですがF会場（3階）とH会場（2階）に設定され、講演を聞くための移動と3階会場が異常に混雑するケースが多く馬酔を重ねたシニアにはつらいものがありました。

さらに、私どもも参加させていただいた特別セッション「中小企業と公的機関」と「交流会」は新たな学会の趣向として取り組まれました。簡単な企業紹介をかねた講演とその後の交流討論の構成で、参加者が解決したい疑問や問題の解決、糸口の発見などのできる可能性のある機会提供の場となりうるセッションです。もう少し工夫の余地はあるものの、今後新たな楽しみの有るセッションでした。

* Nagasawa, Tsugio
(株)クニムネ
東大阪市高井田 14-8 (〒577-0053)

ここまで、どちらかといえば今次学会の好印象となった光の部分について、書き連ねてきましたが、少し気になった影の部分？について触れます。1つは、青木固賞の該当がなく本年次は表彰されなかったことです。選考委員長の大嶋先生も今後への心配と奮起を期待すると言われていたことです。青木固氏と言えば、戦後満州から帰国され長野県から日精樹脂工業(株)を起業された伝説の人物。私も青年時代にチラッと「背の高い、精悍な風貌の同氏」をお見かけしたことを思い出します。もう1つは、特にレセプションパーティで若い参加者が、5-6年前に比べ減っているのではないかと思ったことです。やはり発表会場でもそう

ですが、若者が自身の意見を思い切りぶつけるいい機会です。大いに参加し、自身を鍛えてもらいたいな一と感じた次第です。

最後に20世紀は、ポリマー分野もちろん、科学が大いに発展した時代ではありましたが、一方で、戦争の世紀ともいわれ2回の世界大戦を経て、21世紀初頭の、いまは貧困と富裕層の対立やテロに象徴される「いくさ」や「殺戮」が多く発生する時代です。21世紀は何とか「すべての生物が住みよい地球時代」を作り出せるようとの思いでいっぱいです。

『出会いの場からマリアーージュ』を期待して

堀 米 操*

第28回年次大会の実行委員の方からのご依頼を受け、成形加工学会にシニアの目として初参加させて頂きました。せっかくの機会ですので、極力異なる種類のセッションを拝聴しようと考え、構造・物性・評価、工業レオロジー、接着・接合、アロイ・ブレンド技術等の複数の会場を聴講致しました。全体の印象として、本学会には成形加工に関わるアカデミア、素材・機械・加工それぞれの研究者が多く集って居り、活気が有る点を強く感じました。また、今回企画された特別セッションの中でもナノ材料、接着・接合に関しては個人的にも関心がありましたので、興味深く拝聴しました。これらのトピックスに興味を持たれていたのは私だけでは無かっただろうと感じます。比較的広い会場であるにもかかわらず、長時間立って聴講の方が数多く居られた事がその証拠でしょう。これらの企画を立案された実行委員の方々の慧眼に敬意を表します。また、細かな工夫ですが開会期間中に学会HPで予稿集を参照出来た点も有りがたく感じました。併せて実行委員の方々に感謝

致します。

今回の年次大会のスローガンは『素材と技術のマリアーージュ』でしたが、異なる分野の専門家が集う場を提供するという観点からはスローガン通りであり、この結果は高く評価されるべきだと考えます。研究発表に関しては、自分自身はレオロジーや界面化学等の物性評価に関わる仕事が長かったため、成形加工の現象論をレオロジー面から解析している研究発表や材料の機能発現を界面化学的なアプローチから解析している研究発表には懐かしさを覚えるとともに、その研究内容の進展には敬意を表したいと思います。一方で少々残念な点を上げれば、現象論・評価手法に偏る発表が見られたり、せっかく複数の専門分野の研究者が集う場なのに素材面と装置・機械面との連携がもっと取れればと感じる発表が見られたりした事かと思います。今後、今回の年次大会が提供した『出会いの場』から複数の『マリアーージュ』が今後生まれていくことを期待します。「なるほど」と思わせる『マリアーージュ』や意表をついた『マリアーージュ』が学問の進歩をもたらして欲しいものです。秋季大会が次回の年次大会にはその成果が見られる事でしょうから、続けて参加させて頂いてその成り行きを見させて頂きたい思っております。

* Horigome, Misao
DIC(株) R&D 本部
オープンイノベーション推進グループ
佐倉市坂戸 631 (〒285-8668)